

令和4年度第5回紀南地域高等学校活性化推進協議会

配 付 資 料

- 令和4年度 紀南地域高等学校活性化推進協議会 委員名簿・・・・・・・・ P 1
- 【資料1】 令和4年度第4回
紀南地域高等学校活性化推進協議会の概要・・・・・・・・ P 2
- 【資料2】 令和4年度の協議とアンケート結果をふまえた
紀南地域の高等学校のあり方について・・・・・・・・ P 4
- 【参考資料1】 紀南地域の県立高校に関するアンケート結果・・・・・・・・ P 7
- 【参考資料2】 令和7年度に想定される
5学級規模の高等学校の学びについて・・・・・・・・ P 10
- 【参考資料3】 東紀州地域 中学校卒業生数の推移と予測（含社会増減）・・ P 16
- 【参考資料4】 熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数（予測）と
木本・紀南両高等学校への入学者数・・・・・・・・ P 17
- 【別冊資料】 令和4年度紀南地域高等学校活性化推進協議会のまとめ（案）

令和4年度 紀南地域高等学校活性化推進協議会 委員名簿

No		所属及び名前
1	学識経験者	三重大学教育学部 教授 平山 大輔
2	地域有識者	熊野商工会議所 青年部幹事 森本 健一
3		文恵丸水産 代表 長山 行文
4		紀宝町商工会 会長 田尾 友児
5	市町教育委員会	熊野市教育委員会 教育長 倉本 勝也
6		御浜町教育委員会 教育長 辻本 誠一
7		紀宝町教育委員会 教育長 西 章
8	小中学校PTA代表	紀南PTA連合会 会長 野地本 隆
9		紀南PTA連合会 進路研究委員長 倉本 崇弘
10	高等学校PTA代表	県立木本高等学校PTA 会長 道前 涼太
11		県立紀南高等学校PTA 会長 中嶋 悦雄
12	同窓会・地域代表	県立木本高等学校同窓会 会長 森岡 忠雄
13		県立紀南高等学校学校運営協議会 会長 廣畑 勝也
14	小中学校長代表	熊野市立木本小学校 校長 川崎 奈保美
15		御浜町立尾呂志学園中学校 校長 高田 有治
16	小中学校教員代表	熊野市立金山小学校 教諭 久保 範顕
17		御浜町立御浜中学校 教諭 大崎 重久
18	県立高等学校長	県立木本高等学校 校長 松本 徳一
19		県立紀南高等学校 校長 堀越 英範
20	県立高等学校教員代表	県立木本高等学校 教諭 寺前 淑湖

令和 4 年度第 4 回紀南地域高等学校活性化推進協議会の概要

1 日時 令和 4 年 1 月 8 日（火）19 時 00 分から 21 時 00 分まで

2 場所 三重県熊野庁舎

3 概要

令和 7 年度に紀南地域で 1 学年の総学級数が 5 学級規模になる際に想定される学びと配置のあり方について協議を進めていくにあたり、紀南地域の中学生や保護者を対象に実施したアンケート調査の結果を、どのように捉え、どのように生かして行くべきか等について協議しました。

主な意見は次のとおりです。

《アンケート結果から考えられる学びへの期待や学級数・学級配置等について》

- 中学生は多様な進路に応じた学習や多くの人々との出会いを求めているのに、高校で学びたい学級数は 1 学級・2 学級・3 学級として小さい規模を選んでいる。このねじれた結果をしっかりと読み解く必要がある。
- 高校では学級数が少なくても、複数の中学校から生徒が集まってくることによって新しい出会いもあるということに期待しているのではないか。
- この地域の中学校は人数の少ない学校が多いため、在籍する中学校を越える大きな規模の学校をイメージしにくかったのではないだろうか。アンケート結果からは、現在在籍している中学校の学年の人数より、少し大きめの学級規模を選んでいることが読み取れる。
- アンケート結果は一見ちぐはぐに思えるところもあるが、中学生は回答にあたり、網羅してではなく、1 つ 1 つの問いに率直に答えたのではないか。
- 保護者は令和 7 年度の 5 学級の配置として、1 校 5 学級を最も多くの人を選んでおり、その理由としては学校のなかで選択肢が増える、部活動が充実するという積極的賛成の意見と、生徒減を考えるとやむを得ないと言う消極的賛成の意見があるため、結果を丁寧に分析する必要がある。
- 独立か分校化かにかかわらず、2 校舎の存続を望む意見をあわせるとほぼ半数となり、1 校舎にすることに慎重な意見もあると感じた。
- 校舎を 1 つにするか、2 つ残すかは別として、5 学級の学びを 1 校として統合することを望む意見が 6 割となるため、これからの協議に際し、柔軟な視点から検討していく必要がある。
- 学校現場から考えると、友人関係に悩む中学生にとっては、学ぶ場所の選択肢があるほうがよい場合もある。
- 高校での学習については、半数近くの中学生在明確な目標を持っていないことから、高校受検時だけでなく入学後にも柔軟に進路選択ができるようにしてもらいたい。

- 自分の人生の選択肢がきちんとある方が望ましいことを考えると、入学した学校に多様な選択肢があることがより大切ではないか。中学生や保護者のアンケート結果からも、「選択する力を育てる教育」を期待する割合が高く、就職や進学等の多様な進路に応じた学習を選択できることが強く求められている。

《アンケートの活用と今後の協議の進め方について》

- 今回のアンケートは協議会で議論して決めた方法で適切に実施されたもので、その結果については大事に取り扱うべきである。
- アンケートは地域の声として重く受け止めなければならないが、この結果は令和7年度の高校のあり方をどのように考えるかという当事者の意見である。協議会としては令和7年度だけでなく、15年先をみすえた視点を大事にしながらアンケート結果を読み取り、議論を進めなければならない。
- 当協議会では「県立高等学校活性化計画」に基づいて、紀南地域の高校でどのような学びと配置が必要であるのかを常に意識しながら議論を進めるべきである。
- アンケート全体をみると、中学生も保護者も、高校には「多様な進路に応じた学習」を求めるなど学習の選択肢を重視するとともに、「将来を選択する力」、「社会性や協調性・コミュニケーション能力」の育成を期待している。また、中学生は高校で多くの出合いを期待していることが読み取れ、このような中学生や保護者の思いを今後の協議において参考にすべきである。
- アンケート結果からは、地域の中学生も保護者も「進路選択の力」や「主体的に学び続ける力」を育む教育を期待していることが分かる。この地域の子どもたちに対して、どのような学びと配置によってそれらを保障することが可能なのか、具体的な提示をもとに議論を進めてはどうか。
 - ⇒（事務局）次回以降の協議会において、アンケート結果をふまえた具体的な学びと配置のあり方を提示しながら、さらに丁寧に議論を積み重ね、今年度中には令和7年度の5学級規模の学びについて、当協議会としての方向性をまとめていきたい。

《その他》

- 当地域は遠くても行きたい学校を選べる地域と違い、通学費用の問題は大きいことを理解してほしい。高校を選ぶときに重視することに「通学しやすさ」を選んでいる中学生や保護者は、1校に統合することで、今まで必要でなかった交通費がかかることを心配している。

令和 4 年度の協議とアンケート結果をふまえた紀南地域の高等学校のあり方について

1 令和 4 年度の協議とアンケート結果をふまえたこれからの紀南地域の学びについて

(1) 紀南地域の高校がめざすべき教育や役割に係るこれまでの議論について (第 4 回資料 2)

- ・ 学びの選択肢が充実し、生徒が自ら学びたいと思える学校
- ・ 生徒の 進路実現に向け、大学進学や地元への就職 にも対応できる学校
- ・ 様々な団体と連携する活動が充実し、全国に誇れる魅力ある教育活動 を行う学校
- ・ 地域の産業や企業と連携した学び
小中学校、大学等の地域の教育機関と連携した学び 等
- ・ 様々な支援が必要な生徒をはじめ、一人ひとりへの丁寧な指導 により 自己肯定感を

高

める 学校

- ・ ICT を活用して地域外ともつながる学習活動が充実 している学校
- ・ 学校行事や部活動が活発化 している学校
- ・ 集団の中で多様な考えや価値観に触れながら、豊かな社会性、人間性を育む 学校

(2) 中学生や保護者へのアンケート結果について

(中学生、保護者の少なくとも一方の割合が 50%以上、またはあわせた割合が 35%以上)

- ・ 進学や就職など多様な進路に応じた学習 を選択できる教育
中学生 73 人 (30.4%)、保護者 270 人 (65.1%) あわせて 343 人 (52.4%)
- ・ 自分の将来を選択する力 を育てる教育
中学生 135 人 (56.3%)、保護者 170 人 (41.0%) あわせて 305 人 (46.6%)
- ・ 社会性や協調性、コミュニケーション能力 を育てる教育
中学生 71 人 (29.6%)、保護者 176 人 (42.4%) あわせて 247 人 (37.7%)
- ・ 多くの人と出会う ことを期待している
中学生 138 人 (57.5%) ※保護者への質問事項はなし

(中学生、保護者の少なくとも一方の割合が 40%以上 50%未満、またはあわせた割合が 25%以上 35%未満)

- ・ 5教科など中学校で学習する内容を深める 学習
中学生 99 人 (41.3%) ※保護者への質問事項はなし
- ・ 自ら学び続ける力 を育てる教育
中学生 63 人 (26.3%)、保護者 158 人 (38.1%) あわせて 221 人 (33.7%)
- ・ 社会人として必要なマナーや礼儀・責任感 を身につけることができる教育
中学生 56 人 (23.3%)、保護者 114 人 (27.5%) あわせて 170 人 (26.0%)
- ・ 通学しやすい
中学生 75 人 (31.3%)、保護者 94 人 (22.7%) あわせて 169 人 (25.8%)
- ・ 大学進学につながる学力向上 を目指した学習
中学生 51 人 (21.3%)、保護者 114 人 (27.5%) あわせて 165 人 (25.2%)

※中学生は 240 人、保護者は 415 人が回答していることから、あわせた割合は分母を 655 人として算出

(3) これからの紀南地域の高校に求められる学びについて

- ・ 多様な進路に応じた学びの選択肢が充実し、生徒が主体的に学べる 学校
- ・ 校内外の生徒や社会とのつながりの中で、社会性や協調性、コミュニケーション力を育む 学校
- ・ 学校行事や部活動が充実し、生徒が活発に活動できる 学校
- ・ 多様な生徒 1 人ひとりに丁寧に対応したきめ細かな指導が充実 している学校

2 求められる学びの実現に向けて想定される現状と課題

(1) 多様な進路に応じた学びの選択肢が充実し、生徒が主体的に学べる学校

- ・学びの選択肢については、「校内の授業の選択」と「学校の選択」の2つが考えられる。
- ・アンケートの結果では、中学生も保護者も「多様な進路に応じた学習の選択」を期待しているが、学級数が小さくなるにしたがって系列や選択科目数は少なくなっている。
【参考1・2】
- ・木本高校は一人ひとりの進路実現に向けた普通科の学びや全国に先駆けた総合学科の学びを、紀南高校は地域と連携した学びや一人ひとりに応じたきめ細かな学びを特色としている。

【参考1】学級数の違いによる普通科の科目選択の状況（木本高校）

	H24 入学生（2学級）	R4 入学生（3学級）
系列	1年1系列 普通 2年2系列 文系、理系 3年3系列 文系Ⅰ、文系Ⅱ、理系	1年2系列 選抜、普通 2年3系列 選抜（理系）、選抜（文系）、普通 3年3系列 選抜（理系）、選抜（文系）、普通
選択科目 (複数教科間)	3年 文系ⅡⅡ…2単位（国語、公民）	2年 普通…6単位（国語、地歴、数学、芸術等） 3年 選抜（文系）…2単位（国語、公民） 普通…9単位（国語、公民、数学、芸術等）

【参考2】学級数の違いによる総合学科の自由科目の選択と系列の状況（木本高校）

	H25 入学生（3学級）	H30 入学生（2学級）	R4 入学生（1学級）
2年	17科目から10単位選択	12科目から8単位選択	10科目から10単位選択
3年	29科目から19単位選択	25科目から19単位選択	20科目から19単位選択
系列数	6系列	4系列	2系列

(2) 校内外の生徒や社会とのつながりの中で、社会性や協調性、コミュニケーション力を育む学校

- ・学校の規模が小さくなると、学校生活において多様な価値観にふれる機会を保つことが難しくなる。
- ・紀南高校はコミュニティスクールの仕組みを活用して地域が学校教育に参画している。

(3) 学校行事や部活動が充実し、生徒が活発に活動できる学校

- ・生徒数の減少に伴い、部活動数や部員数も少なくなっている。【参考3】
- ・紀南高校では、遠方の学校と合同チームを組んで大会に出場することもあり、その際、合同練習の時間確保が難しくなっている。

【参考3】木本高校と紀南高校の部活動数と部員数の状況

	年度	募集定員	全学級数	全生徒数	運動部数	部員数	文化部数	部員数
木本高校	R元年度	5学級	15組	580人	15部	264人	10部	199人
	R4年度	4学級	12組	472人	12部	220人	5部	140人
紀南高校	H24年度	3学級	9組	326人	8部	115人	10部	59人
	R4年度	2学級	6組	196人	7部	51人	9部	48人

(4) 多様な生徒1人ひとりに丁寧に対応したきめ細かな指導が充実している学校

- ・紀南地域の小中学校では、小規模な学級できめ細かな指導が行われているが、多様化・複雑化する生徒の課題に対応するには、複数教員の異なる視点からの支援も大切となる。
- ・この地域では規模が小さい小中学校も多く、児童・生徒は、小さい頃からお互いがそれぞれの特性を理解しあって学校生活を過ごしている。一方、アンケート結果からは、中学生は高校で多くの人との出会いを望んでいる。

3 5学級規模における学びと配置のあり方について（案）

- ・中学校卒業生数が減少していく中であっても、地域の様々な分野で活躍できる人材を育成する視点を大切にして、大学進学や就職などの進路希望の実現につながる学びとともに、多様な生徒に応じて地域と連携したきめ細かな学びを提供する。
- ・多様な学びの選択肢の提供や豊かな社会性・人間性の育成、学校行事や部活動の充実のためには、一定の学級規模や学校運営の工夫が必要である。
- ・地域と連携したきめ細かな学びについては、木本高校及び紀南高校それぞれで先駆的に取り組んできた活動を継承する。
- ・地域全体で1学年5学級となる中、こうした学びを実現するためには、2校を一体的に運営するとともに、これまでのきめ細かな学びを継続できる高校としていく必要がある。
- ・以上のことから、木本高校と紀南高校は一つの高校に統合し、それぞれの校舎を活用した校舎制とすることとする。学科については、普通科3学級を木本校舎に配置し、総合学科1学級を木本校舎及び紀南校舎にそれぞれ配置する。
- ・今後、各校舎で学習することを基本としつつ、両校舎が一体となった活動や連携した授業も行うこと、学校行事や部活動がより魅力的で少しでも多様な活動となるようにすること、教員や生徒が必要に応じて両校舎間を行き来すること、教職員が校舎・学科・課程の枠を越えて連携することなどについて、関係者で具体的な内容と方策を検討する。

【参考4】木本高校・紀南高校卒業生の進路状況

卒業年度	卒業生数		四年制大学	短期大学等	専修学校	各種学校	就職	その他	看護大高看准看
平成29年度	281	人数	92	16	75	5	82	11	(33)
		(%)	32.7	5.7	26.7	1.8	29.2	3.9	(11.7)
平成30年度	303	人数	95	19	85	0	93	11	(31)
		(%)	31.4	6.3	28.1	0.0	30.7	3.6	(10.2)
令和元年度	283	人数	84	26	77	3	82	11	(28)
		(%)	29.7	9.2	27.2	1.1	29.0	3.9	(9.9)
令和2年度	263	人数	77	22	82	3	71	8	(30)
		(%)	29.3	8.4	31.2	1.1	27.0	3.0	(11.4)
令和3年度	250	人数	93	24	75	1	46	11	(32)
		(%)	37.2	9.6	30.0	0.4	18.4	4.4	(12.8)
		平均(%)	32.1	7.8	28.6	0.9	26.8	3.8	11.2

令和7年度	200人程度	想定人数	進学希望見込み		就職希望見込み	看護希望見込み
			79.7人	59人	53.7人	
						22.4人

※見込み人数として、過去5年間の平均をもとに算出したもの。

紀南地域の県立高校に関するアンケート結果

1 中学生を対象としたアンケート結果

A 学びについて

(高校を選ぶときに重視すること)

- ・30%を超える生徒が「通学のしやすさ」(31.3%)や、「進学や就職など多様な進路に応じた学習の選択ができること」(30.4%)を重視している。
- ・約25%の生徒が「多くの友だちや先生との出会い」(26.7%)、「学校行事の充実」(24.6%)、「入りたい部活動があること」(23.8%)を重視している。

(高校で学びたい学習)

- ・40%近い生徒が高校で学びたい学習について「わからない、まだ決まっていない」(37.9%)としている。
- ・40%を超える生徒が「国語、社会、理科、英語など中学校で学習する内容を深める学習」(41.3%)を学びたいとしている。

(高校に期待する教育)

- ・約56%の生徒が「自分の将来を選択する力を育てる教育」(56.3%)を期待している。
- ・30%近い生徒が「社会性や協調性、コミュニケーション能力を育てる教育」(29.6%)を期待している。
- ・約25%の生徒が「自ら学び続ける力を育てる教育」(26.3%)、「基本的な知識を身に付ける教育」(24.6%)、「社会人として必要なマナーや礼儀・責任感を身につけることができる教育」(23.3%)を期待している。

B 学級の規模について

- ・選んだ生徒の割合が多い順に「1学級」(27.9%)、「2学級」(27.1%)、「3学級」(26.3%)の学校で学びたいとしている。
- ・続いて、「5学級」(10.8%)、「4学級」(7.9%)の学校で学びたいとしている。
- ・生徒の多くが学びたい学級規模に関係なく、学びたい学級規模を「友だちや先輩、先生など、多くの出会いがあると思うこと」(57.5%)を理由として選んでいる。

【中学生の意見】

- ・高校を選ぶとき「進学や就職など多様な進路に応じた学習を選択できること」や「通学のしやすさ」、「多くの友達や先生との出会い」、「入りたい部活動があること」を重視している。
- ・高校では、「5教科などの中学校での学びを深める学習」をしたいと考えている。
- ・高校には、「自分の将来を選択する力」、「社会性や協調性、コミュニケーション能力」、「自ら学び続ける力」などを育む教育を期待している。
- ・「1～3学級」の学校で学びたいと考えており、その理由は学級規模を問わず、「友だちや先輩、先生など、多くの出会いがあると思うこと」としている。

2 保護者を対象としたアンケート結果

A 学びについて

(高校を選ぶときに重視すること)

- ・約 65%の保護者が「進学や就職など多様な進路に応じた学習の選択ができること」(65.1%)を重視している。
- ・約 28%の保護者が「大学進学につながる学力向上を目指した学習ができること」(27.5%)を重視している。

(高校に期待する教育)

- ・約 40%の保護者が「社会性や協調性、コミュニケーション能力を育む教育」(42.4%)、「進路選択の力を育む教育」(41.0%)、「主体的に学び続ける力を育む教育」(38.1%)を期待している。
- ・約 28%の保護者が「社会人として必要なマナーや礼儀・責任感を身につけることができる教育」(27.5%)を期待している。

B 令和7年度の紀南地域の高校のあり方について

- ・約 45%の保護者が「2校を統合した学校で学ぶ(1校5学級)」(44.6%)を選択している。
- ・約 36%の保護者が「統合せずに、それぞれの学校で学ぶ(1校3学級+1校2学級)」(35.9%)を選択している。
- ・約 10%の保護者が「2校を統合して1校を分校とし、2つの校舎で学ぶ(本校3学級+分校2学級)」(9.9%)を、約 4%の保護者が「2校を統合して1校を分校とし、2つの校舎で学ぶ(本校4学級+分校1学級)」(3.6%)を選択している。

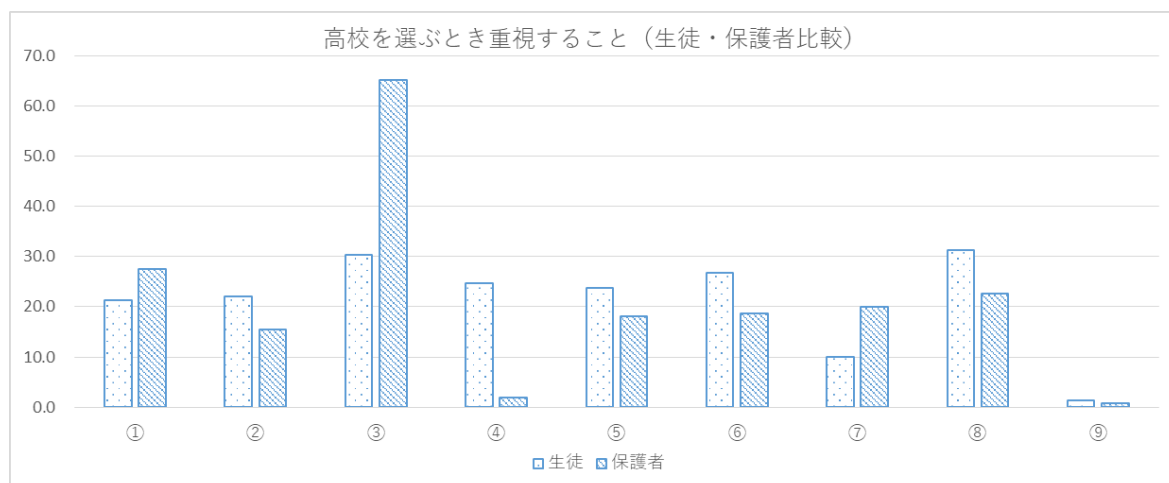
【保護者の意見】

- ・高校を選ぶとき「進学や就職など多様な進路に応じた学習の選択ができること」や「大学進学につながる学力向上を目指した学習ができること」を重視している。
- ・高校には、「社会性や協調性、コミュニケーション能力を育む教育」や、「進路選択の力を育む教育」、「主体的に学び続ける力を育む教育」、「社会人として必要なマナーや礼儀・責任感を身につけることができる教育」を期待している。
- ・令和7年度の地域の高校のあり方については、半数近くの保護者が「2校を統合した学校で学ぶ(1校5学級)」を選択する中、3分の1を超える保護者が「統合せずに、それぞれの学校で学ぶ(1校3学級+1校2学級)」を選択している。

3 生徒と保護者の回答の比較

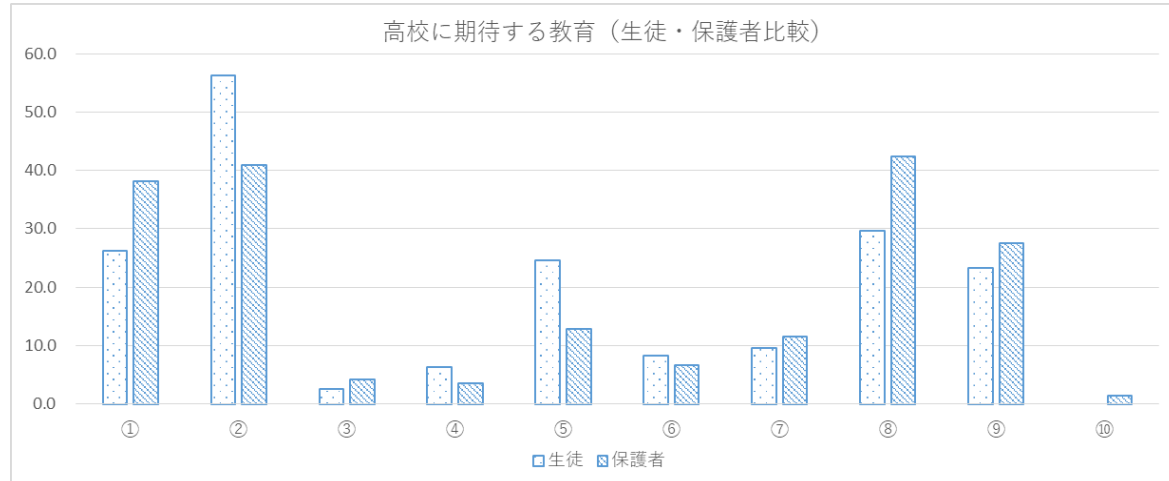
(1) 高校を選ぶとき重視すること (回答は2つ以内、()は各回答者数に対する割合)

項目	生徒	保護者
①大学進学につながる学力向上を目指した学習ができる	51 (21.3%)	114 (27.5%)
②就職につながる専門的な知識や技能、資格が取得できる	53 (22.1%)	64 (15.4%)
③進学や就職など多様な進路に応じた学習を選択することができる	73 (30.4%)	270 (65.1%)
④文化祭や体育祭などの学校行事が充実している	59 (24.6%)	8 (1.9%)
⑤入りたい部活動がある	57 (23.8%)	75 (18.1%)
⑥多くの友だちや先生と出会うことが期待できる	64 (26.7%)	77 (18.6%)
⑦一人ひとりに目が行き届きやすく、きめ細かな教育が期待できる	24 (10.0%)	83 (20.0%)
⑧通学しやすい	75 (31.3%)	94 (22.7%)
⑨その他	3 (1.3%)	3 (0.7%)



(2) 入学する高校に期待する教育 (回答は2つ以内、()は各回答者数に対する割合)

項目	生徒	保護者
①自ら学び続ける力を育てる教育	63 (26.3%)	158 (38.1%)
②自分の将来を選択する力を育てる教育	135 (56.3%)	170 (41.0%)
③地域について学ぶ教育	6 (2.5%)	17 (4.1%)
④人権に対する意識を高める教育	15 (6.3%)	15 (3.6%)
⑤基本的な知識を身につける教育	59 (24.6%)	53 (12.8%)
⑥ICTを積極的に活用する教育	20 (8.3%)	28 (6.7%)
⑦広く世界で活躍できる力を育てる教育	23 (9.6%)	48 (11.6%)
⑧社会性や協調性、コミュニケーション能力を育てる教育	71 (29.6%)	176 (42.4%)
⑨社会人として必要なマナーや礼儀・責任感を身につけることができる教育	56 (23.3%)	114 (27.5%)
⑩その他	0 (0.0%)	6 (1.4%)



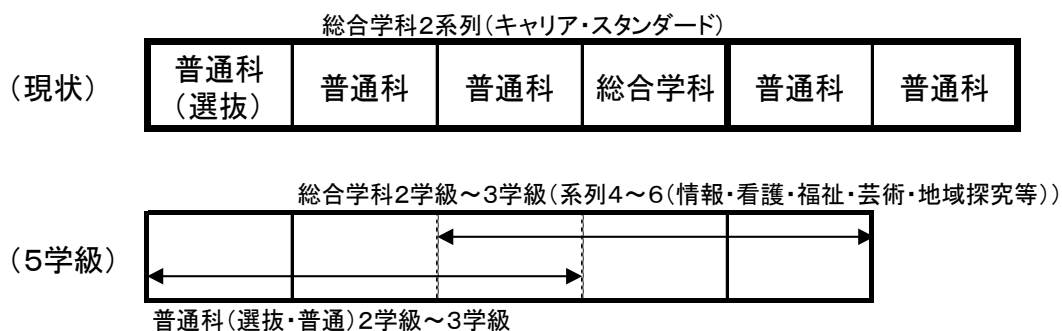
令和7年度に想定される5学級規模の高等学校の学びについて

想定A 2校が統合して1つの校地で学ぶ（1校5学級規模）

【4学級から5学級へ1学級増となる際の状況変化を中心に記述】

○想定される学習活動

- ・教員数が増えることから、理科（物理、化学、生物、地学）や地理歴史（日本史、世界史、地理）、芸術（音楽、美術、書道）などについて、これまでより多くの科目で専門性の高い教員を配置できる可能性が高まる。
- ・多様な科目の講座開設が可能となるなど、難関大学から専門学校までの進学や就職などの生徒の幅広い進路希望に応える教育活動がより充実する。
- ・将来の進路に関わって同じ興味・関心や目標を持つ者同士が一定数集まって学び合うなどの教育活動が充実する。さらに ICT を活用して他校とつながることでより効果的な学習に発展することが期待できる（R4～ 他校の夏期課外をオンラインで受講）。
- ・総合学科で学級増を行えば、現在の1学級2系列を2～3学級4～6系列にすることが可能となり、生徒のニーズの高い看護・福祉系、芸術系だけでなく、紀南高校で培ってきた地域を学び場とした学習を系列として設けることもできる。こうした地域を学び場とした学習は生徒が1校に集まることから、より広域かつ多様なテーマで学習を進めていくことも可能となる。



○想定される学校行事や部活動

- ・生徒数が増えることから、文化祭では学級や部活動の発表数が増え、体育祭では種目数や競い合う機会が増えるなど、学校行事をこれまでより活性化させることができる。
- ・部活動については、生徒数が増えることにより、団体競技における大会への参加の可能性が広がることや、多様な部活動の設定がある程度可能となる。また、既存の部活動についても、部員数の増加が見込まれ、活動がより活発となる。

○想定される生徒の状況等

- ・生徒や教職員の人数が増え、生徒は学校生活全般を通じて多様な価値観に触れ、切磋琢磨しながら協働的に学ぶ機会が増すことから、社会性・人間性の育成が一層期待できる。

- ・紀南地域の中学校卒業者の8割を超える生徒が同じ高校で学ぶことから、地域全体の子どもたちのつながりの一層の広がりが期待できる。
- ・一方、地域の中学生が1つの高校で学ぶことになるため、入試時や入学後も目的意識を持ちながら学習できるよう、5学級規模のうち総合学科を2～3学級にしたり、普通科にコースを設置したりすることで、校内に学びの選択肢を作るなどの工夫が必要である。
- ・今後も続く地域の中学校卒業者の増減に柔軟に対応することができる。

＜第2回協議会（7/14）の意見等＞

○学びについて

- ・生徒の興味・関心に応じた学習を選択できることが見込まれる
- ・より大きな学級規模となり、生徒の学習環境や授業内容が充実することが見込まれる

○部活動について

- ・地域からのニーズが高い部活動の維持につながり、社会性・人間性の育成に大きな効果が期待できる
- ・部活動の充実を求めて地域外へ進学する生徒もいるため、1校に統合して部活動を活発化し、ニーズに応えることが期待できる

○生徒の状況について

- ・大きな集団にすることでクラス替えもできることから、生徒は自分の居場所をつくることが期待できる
- ・紀南地域の中学校卒業者の8割を超える生徒が高校時代を一緒に過ごすことで、この地域の多様な価値観を持つ同年代の仲間とのつながりが広域で形成されることが期待される

○想定Aにおいて工夫すべき事項や課題

（学びについて）

- ・生徒一人ひとりに応じた丁寧な指導や支援を継続させていく工夫が必要
- ・地域の担い手を育む教育を進めるための工夫が必要
- ・学校の選択肢がなくなることで、生徒の学習に対するモチベーションが下がらないようにする工夫が必要

（通学について）

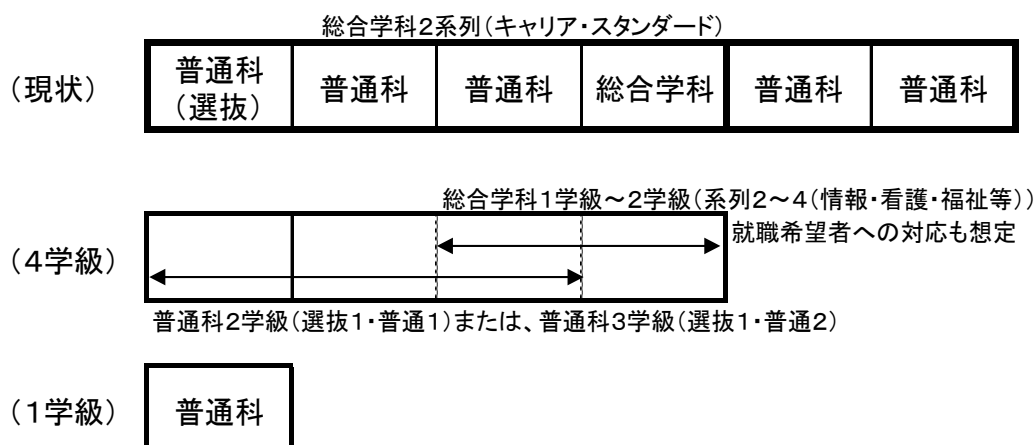
- ・現在より通学に時間のかかる生徒への支援の検討が必要

想定B 2校が連携して2つの校地で学ぶ（4学級＋1学級）

【2学級から1学級となる際の状況変化を中心に記述】

○想定される学習活動

- ・1学級の学校では、生徒数・教員数は少なくなるものの、引き続き学び直し等の丁寧な指導や地域を学び場とした学習を行うことができる。
- ・教員配置は一般的に約8人となることから、単位数の小さい科目における常勤の教員の配置や生徒のニーズに応じた選択科目の開設は難しくなる。
- ・専門性の高い非常勤講師の確保が難しい当地域では、分校化して同じ学校の教員が学校間を行き来した授業や、ICTを活用した遠隔授業の実施など4学級規模の高校との連携や、地域を学び場とした学習等においてより地域と連携した活動を推進するなど様々な工夫が必要と考えられる。
- ・体育の授業は、1学級を男女別に分け、1講座の生徒数が20人を下回る状況が生じるため、ソフトボールやサッカーなどの集団競技において工夫が必要となる。



○想定される学校行事や部活動

- ・1学級の学校では、文化祭の部活動や学級の発表はこれまでと比べて半分となる。体育祭では生徒の活躍の機会が増える一方、同じ生徒同士が競い合う場面が多くなる。
- ・部活動では、部員数の減少に伴い、特に3年生の引退に伴って単独出場ができなくなることも多くなり、同じ状況の学校と合同チームを編成して大会に出場することが増える。
- ・現在のルールでは、単独出場ができない学校同士が合同チームを編成し大会に出場しているため、分校化することにより同一校として大会に出場することも考えられる。その際、週のうち何日かは、JRやバス等を利用していずれかの学校において練習することとなる。

○想定される生徒の状況等

- ・1学級規模ではクラス替えがなく、多様な価値観に触れる機会の減少や、人間関係の固定化が懸念されるため、学校行事、部活動だけでなく、日々の教育活動においても生徒が両校間を移動して共に学ぶ機会を設けるなどの工夫が必要となる。

- ・紀南地域は私立高校がなく公立高校のみで入学定員を設定しているため、2校をあわせると一定数の欠員が生じることとなる。欠員が1学級規模の学校に偏ると、定員の40人を大きく下回る入学者数となることも考えられ、入学者数が安定せず、生徒の学習環境が年度ごとに変化することが懸念される。

＜第2回協議会（7/14）の意見等＞

○学びについて

- ・生徒一人ひとりに対応した少人数ならではの丁寧な指導が継続できる

○生徒の状況について

- ・2校舎が存続することで、生徒の通学環境は変わらない

○想定Bにおいて工夫すべき事項や課題

（学びについて）

- ・豊かな社会性・人間性の育成のために、地域と協働した教育活動の推進やICTの活用が必要
- ・学びをより充実するために、校舎制にして、授業では教員が、学校行事や部活動では生徒が、校舎間を移動するなどの検討が必要

（部活動について）

- ・人数が少ないことで活動に制限がかかることへの対応が必要

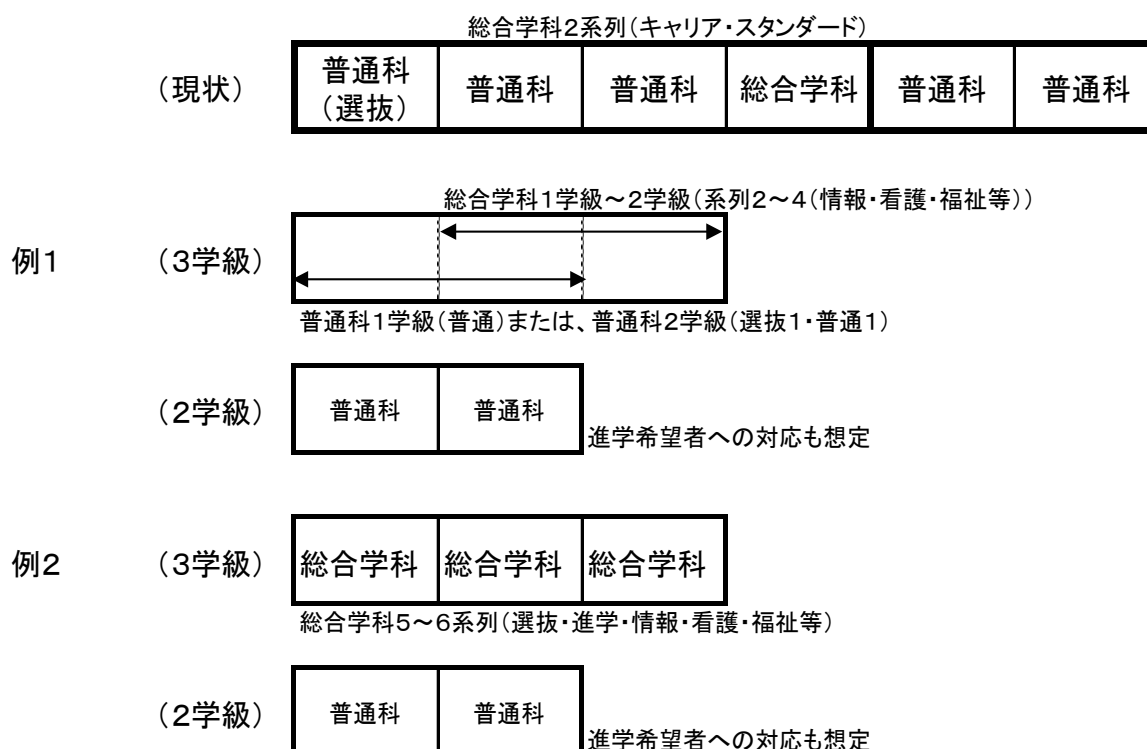
（教育環境の確保について）

- ・1学級規模の学校において大きく欠員を生じたときを想定した、教育環境の確保について検討が必要

想定C 2校が独立して学ぶ（1校3学級+1校2学級）
 【4学級から3学級へ1学級減となる際の状況変化を中心に記述】

○想定される学習活動

- ・3学級の学校では、教員数が減ることから、理科や地理歴史、芸術等において、それぞれの科目で専門性の高い教員を配置することが難しくなる。
- ・進学については、大学ごとに面接や小論文を含む受験科目が異なり、問題の難易度や傾向についても様々であるため生徒をグループに分けて指導しているが、教員数が減ることにより、その数を減らすなどして対応することとなる。
- ・選択科目の1講座あたりの受講希望者数も減ることから、学びのニーズに応じた多様な選択科目の開設がこれまでより難しくなる。
- ・地域の学びの選択肢を確保するために、総合学科の学級数を増やすことも考えられるが、普通科1学級・総合学科2学級となり、普通科が現在の3学級から1学級になることで、いくつかの科目では文理別の講座編成が難しくなる可能性がある。
- ・もう一方の2学級の普通科では、引き続き学び直し等の生徒一人ひとりへの丁寧な指導や、これまで取り組んできた地域を学び場とした学習を取り入れながら教育活動を行うこととなる。



○想定される学校行事や部活動など

- ・3学級の学校では、これまでより文化祭や体育祭の規模が縮小される。
- ・教員数と生徒数が減少することから、部活動顧問や活動する生徒の確保が難しくなり、これまで設置していた部活動の整理が必要となる。
- ・2校とも学級規模が小さいため、3年生が引退後の新チームにおいて学校単独での大会出場が難しくなる可能性が双方において高くなる。また、状況によっては合同での出場となるが、2校のうち一方のみが単独出場できる場合は、他方は遠方の学校との合同チームとなることも想定される。

○想定される生徒の状況等

- ・両校とも小規模校であるため、教員との関係や生徒同士の集団の中で多様な考え方に触れながら行われる協働的な学びの機会の確保のために、両校同士や両校とそれぞれの地域との連携がより必要となる。
- ・小規模校では開設科目や部活動数が限定されるため、大学進学に向けた学びや部活動に励みたい中学生は、地域外の高校へ進学していくことが懸念される。
- ・今後も続く学級増減への対応の方向性が明確になりにくく、さらに両校とも小規模校であるため、1学級の増減が生徒の学びに大きく影響することが懸念される。

<第3回協議会（8/31）の意見等>

○生徒の状況について

- ・生徒の多様なニーズがある中、それぞれの校風を生かし、生徒は新たな人間関係をつくるなど、自分に合う学校選択ができる

○想定Cにおいて工夫すべき事項や課題

- ・学校を選ぶ選択肢はあるが、両校舎が小規模校化するため、それぞれの学校内での学びの選択肢が限られる。
- ・それぞれの校舎で教員が減少し、子どもたちの多様な学びの保証や部活動の維持も難しくなり、教育環境の確保について検討が必要

※2校が連携する3学級規模の本校と2学級規模の分校とすること

保護者へのアンケート内容を検討する際、2校を3学級規模の本校と2学級規模の分校とし、連携しながら学ぶ方法が提案され、選択肢に入れることとなった。

東紀州地域 中学校卒業生数の推移と予測（含社会増減）

参考資料3 R4第2回協議会資料

令和4年5月1日 教育政策課調べ

	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 卒業	R 5.3 現中3	R 6.3 現中2	R 7.3 現中1	R 8.3 現小6	R 9.3 現小5	R 10.3 現小4	R 11.3 現小3	R 12.3 現小2	R 13.3 現小1
尾鷲市	卒業生数	122	118	130	127	119	107	99	120	87	84	68	87
	前年度対比		-4	12	-3	-2	-12	-8	21	-33	-3	-16	19
	R4.3対比					-6	-20	-28	-7	-40	-43	-59	-40
北牟婁郡	卒業生数	115	110	112	121	93	75	94	79	68	79	70	62
	前年度対比		-5	2	9	-6	-18	19	-15	-11	11	-9	-8
	R4.3対比					-22	-46	-27	-42	-53	-42	-51	-59
小計	卒業生数	237	228	242	248	212	182	193	199	155	163	138	149
	前年度対比		-9	14	6	-8	-30	11	6	-44	8	-25	11
	R4.3対比					-28	-66	-55	-49	-93	-85	-110	-99
熊野市	卒業生数	132	113	117	119	109	96	101	104	104	123	98	98
	前年度対比		-19	4	2	9	-13	5	3	0	19	-25	0
	R4.3対比					-19	-23	-18	-15	-15	4	-21	-21
南牟婁郡	卒業生数	172	143	157	149	154	135	140	127	136	137	102	150
	前年度対比		-29	14	-8	-7	-19	5	-13	9	1	-35	48
	R4.3対比					12	-14	-9	-22	-13	-12	-47	1
小計	卒業生数	304	256	274	268	263	231	241	231	240	260	200	248
	前年度対比		-48	18	-6	-7	-32	10	-10	9	20	-60	48
	R4.3対比					-7	-37	-27	-37	-28	-8	-68	-20
東紀州合計	卒業生数	541	484	516	516	475	413	434	430	395	423	338	397
	前年度対比		-57	32	0	-6	-62	21	-4	-35	28	-85	59
	R4.3対比					-35	-103	-82	-86	-121	-93	-178	-119

《参考》

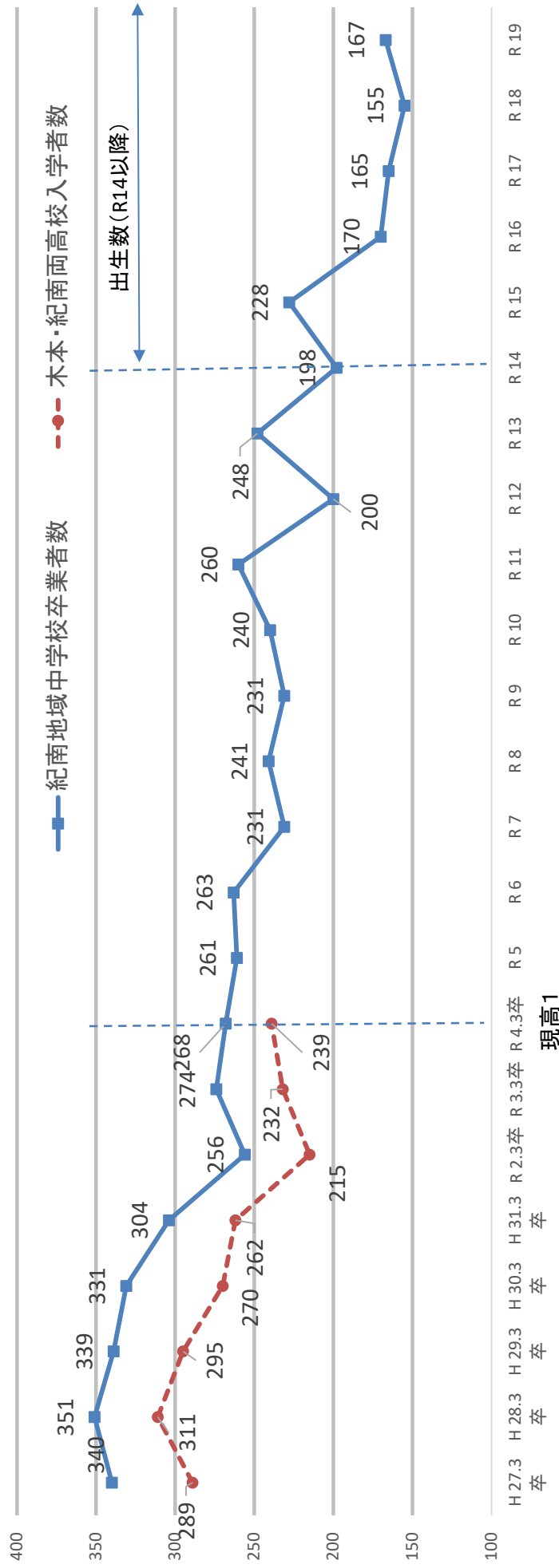
木本高校	募集定員	200	160	160	160	160
	欠員	0	2	0	1	-
紀南高校	募集定員	80	80	80	80	80
	欠員	18	23	8	0	-
学級数	木本・紀南	5・2	4・2	4・2	4・2	4・2

紀南地域の 入学定員の推移予測		R 5年度	R 6年度	R 7年度	R 8年度	R 9年度	R 10年度	R 11年度	R 12年度	R 13年度
	6学級	6学級	6学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	6学級程度	4学級程度	5学級程度

熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数(予測)と木本・紀南両高等学校への入学者数

参考資料4 R4第2回協議会資料

※R14年度以降は地域の出生数を記載



熊野市・南牟婁郡の出生数

	H27年度出生 現小1	H28年度出生 5～6才	H29年度出生 4～5才	H30年度出生 3～4才	R元年度出生 2～3才	R2年度出生 1～2才	R3年度出生 0～1才
熊野市	99	73	108	60	87	82	68
御浜町	52	42	45	39	25	20	38
紀宝町	102	83	75	71	53	53	61
合計	253	198	228	170	165	155	167

1. 木本・紀南両高等学校への入学者人数は、熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数と比較すると、地域外へ進学する生徒や就職する生徒等が一定存在することから、毎年40人～50人少ない状況です。この状況のまま推移すると、両校への入学者数は令和7年度には5学級規模、令和12年度には4学級規模となるが見込まれます。
2. 令和7年度に両校への入学者数が5学級規模となった場合、中学校卒業予定者の進路選択をふまえると、令和7年度以降の当地域における県立高等学校のあり方について協議を進め、方向性を示していく必要があります。